

浴びた人々も二三ならずあるに到つた。而して其の中に於て平子鐸嶺氏の死去は遠き古の事であつたが、最近に於いては工學博士關野貞先生の易簪せらるゝあり、往年の非再建論者の一方の雄を失ひ、學界頗に寂寞の感を加へた。

佐伯啓造氏の主宰する不定期刊行物「夢殿」の第十四冊は、其の第十二冊の「法隆寺の諸問題」、第十三冊の「法隆寺の銘文」の後を受けて、この二冊に於て觸れ得なかつた命題を集成編輯し、加ふるに法隆寺問題に淺からぬ宿縁を有する關野博士の追悼録を以てしたものである。例によりて大和綴の清洒な裝幀であり、すべて二百四十頁を超ゆる大冊である。主なる收載論考は

- 意匠上より見たる法隆寺伽藍建築……………岸田日出刀
  - 玉虫厨子に見えたる文様の源流―分立流雲文に就て……………小杉 一雄
  - 法隆寺金堂の天蓋・須彌壇・土壇・臺層・基壇に就て……………福山 敏男
  - 法隆寺大講堂の平面に就いて……………足立 康
  - 法隆寺蓮華岡屏風に就いて……………望月 信成
  - 法隆寺系殿寺趾の研究……………上田 三平
  - 瑜祇塔私考……………橋本 凝胤
  - 法隆寺と播磨鰯莊に就いて……………魚澄惣五郎
  - 法隆寺金堂四天王像の銘文に關する疑……………中郷 敏夫
- これを見ても法隆寺なるものゝ研究が、既に盡きたるものゝ如くにして今なほ新らしき研究を喚んで居るものなる事が明かにされ

やう。殊に二三の珍らしい篤學者が紹介された事は、私の一つの悦びである。いろ／＼と違つた新らしい人が、斯界に登場し紹介さるゝ事は、何事にも増して學界の慶事でなければならぬ。法隆寺村鴈故郷舎發行、定價二・三〇（以上中村）

○日本農民史

玉川 治 三著

この書は「我が古來の土地制度及び農業政策を究明し、その政策の下に農民は如何なる生活を營み來つたかを闡明すると共に、その政策と國家の隆替との關係を明にし」ようとする意圖の下に著者が東京大學在學の頃より現に松本高等學校教授としてあるまで五箇年に亘る研究の結果になるもの、敘述の範圍は大化改新より明治維新までに限られてはゐるが、從來一二の編纂物を除いて未だ一貫せる一冊の成書をも有しなかつたこの方面の研究に一應最初の形貌を與へたものとして、その出版は近時に於ける注意すべきことの一つといふべきであらう。今、その内容を見るに著者は右の期間を班田制、莊園制並に知行制なる三つの時代に分ち、各時代に於ける農民の生活を専らその經濟的側面に就て見、就中主眼を農家の收支の比較計算におき、その不均衡よりして制度の隆替、時代の變遷を説き明さうとしてゐる。即ち十分なる文獻的徵證を缺くところの氏族制時代は姑く問はず、大化以後いづれの時代に於ても經濟生活の單位をなすものは戸にありとし、各時代に就てそれ／＼その時代の最も普通なる生活を營む標準戸なるものを想定し、この一戸に就てその收入（糶稻）と支出（負課）の額を

可及的精密に算出してその比較を見んとするもの、斯の如き試みは律令時代(本書の所謂班田制時代)に就ては早く龍川政次郎氏其他二三の人々によつてなされ、本書またそれら先人の論著に負ふところ多いやうであるが、著者は同じ方法を更に降れる二つの時代に就ても試みんとしたのである。その方法たるや極めて實證的なるが如くにして實は多分に理念的なるものを含むこと標準戸なるもの、想定が既に之を示すのであつて、殊に班田制時代が統一ある律令の規定により一應容易にその收支の計數を算出し得るに反し、莊園制並に知行制の兩時代に於てはかくの如き一定の標準なく各莊園、所領によつて夫々事情を異にするものがあるが故に、少數の例を以て全班を推すこと極めて困難なるに於ては猶更である。著者がかゝる困難にもかゝはらずよく一貫してその方法を探り得た努力とその手際とは十分認めらるべきであるが、猶例へば莊園制時代に就てその據るところの資料が多くその末期(室町時代)のものに偏する觀があり、従つてその所論も莊園成立時代に關しては如何かと思はれるところのあるが如きまた已むを得ぬことであらう。一般に統計的研究なるものは往々にして極めて眞らしき偽の數字を混じ來ること十分に警戒せらるべく、その爲には現今の正確なる統計が常に對照的に參考せられることが望ましく縦ひ著者の得た數字に誤はないとしても、その對比によつて一層よく數字の意味を説明し得るであらう。

翻つて惟ふに日本農民史なるものは果してよくかくの如き方法のみによつて盡しえられるものであらうか。日本の農民全班に通

ずる生活感情、思想信仰といふが如き、或は農民社會の規範や習俗、農事情行の如きものは姑く措いて、問題を唯經濟生活の一面に限るとしても、猶それを本書に於ける如く常に一戸の收支經濟としてのみ見ることは、よくその全班を把握する所以であらうか。收支の計算それ自體は要するに算術の問題であつて、歴史の問題ではない。それが歴史に關係するといふのはその不均衡によつて制度が變り、時代が選るとせられるからであらうが、一家の私經濟の破綻よりして社會制度の發展を理解するにはその間に一つの飛躍がなされねばならない。本書の三つの時代がそれらその次の時代への關聯に就て説かれてゐるところがあるに拘はらず、なほ個々に獨立した三つの靜止狀態の敘述の如き感を興へるのも蓋しかゝる論理の缺陷に因づくものではないであらうか。筆者としても今一度讀みかへしてよく考へてみたいと思ふ。(菊判五〇五頁、東京成美堂發行、定價四・五〇)

○藝術史研究 (土田杏村全集 第十卷)

○國文學研究 (同 第十二卷)

○日本精神史 (同 第十二卷)

亡くなつた土田杏村の全集は全十五卷の豫定を以て昨年二月以來逐月一卷宛刊行せられつゝあるが、中に就て我々の學問に最も關係ある諸論文を含む第十、十一、十二の諸卷は昨秋十月より今春二月にかけて全部その編纂を終り我々の机上に届けられた。この全集は一應全卷の預約者に限り頒たれることになつてゐて、これらの卷も本誌讀者の目に觸れること或は少きかを思ひ簡單にその

内容を紹介するならば、まづ第十卷藝術史研究(本年二月發行)は内容の類似によつて全卷を佛教美術研究、桃山時代障屏畫論、庭園美の研究、及び藝術史雜纂の四編に分たれ凡て廿五章、就中佛教美術研究は杏村の最も早く心を寄せたところ、京都大學卒業後間なしに藝文に載せた長谷寺銅板佛論並に藥師寺三尊論等を含み、彼の美術史的研究の方法とその手際とを見本的に示せるもの。即ちまづ對象たる作品をば様式に従つて幾つかの群に分ち、その群に屬する作品の中に、他の主として文獻的徵證によつてその作者を明にしうるものを求め、それによつてその一群の作者若しくはその制作年代を推定しようとするのであつて、この方法は第二編桃山時代障屏畫論に於て更に一段の熱意を以て一層廣般圖に試みられてゐる。この方面の研究は著者が晩年最も精力を傾倒したところ、「大覺寺の山樂」を始め三寶院並に智積院の襖繪の作者決定などその業績は正しく研究史上劃期的地位を占めるものである。第三編庭園美の研究は、第四編に於ける能樂や華道や陶磁器に就ての諸論稿と共に著者の關心の博さと理解力の大きさを示すものであるが、それらの諸方面に對する著者の愛好とその造詣の深さに就て聞及ぶ所あるものにとつては稍小品に過ぎてもその足らぬ感がないではない。著者の絶倫なる精力を以てしてもなほその暇をこゝにまで割くを許さなかつた短命が今更惜しまれる。

總じてこの一卷に收められた諸論文が、未だ一度も著者の著書としては取纏められたことのないものが多いに對し、後の二卷の内容をなすものは主として既に一度「國文學の哲學的研究」四卷と

してその價値の認められたものの中より選ばれてゐる。即ち第十一卷國文學研究(昨年十二月發行)は方法論的研究、俳諧文學の研究及び萬葉集の研究の三編十九章より成り、第十二卷日本精神史(昨年十月發行)はそれと相即して神話文學の時代より奈良平安初期並に稍、離れて謡曲の時代に至るまで、わが國の精神生活を主として文學及び美術の面に於て明らかにしようとしてゐる。同じく十九章。今それらの諸編を通じて認められる著者の學風なるものは、あらゆる研究を始めるに先つてまづ明白なる自覺を以てその方法論を究め、然る後廣般圖に參考文獻を涉獵し、その上に興望する直観を以て全體の意味を考へんとするもの、その着眼の銳利にして然も視野の廣般なること、餘人の到底及ぶ能はぬところであらう。

惟ふに杏村は専門家ならぬ意味に於て素人であつた。然もあらゆる文化事象に對する博大なる愛好と、その研究に對する眞率なる態度とに於ては如何なる専門人にも譲らぬものがあつた。その論文には常に若々しい感激と新しい示唆とが盛られてゐる。その自由にして輔はれるところなき態度は却つて専門家に反省を促すものがあらう。最後に、著者の老犬にして多方面なる全著作の中よりその主要なるものを選択し、茲に見るが如き形に取纏められた編纂者大阪商科大学の山根徳太郎氏の並ならぬ勞苦と舊友への厚き友情とに對して心から敬意を表する。(各卷約五〇〇頁、第十卷圖版四〇、東京第一書房發行)(以上栗田)。